

うつしから読み取る技術的アーカイブ

2018年度活動報告

模写は古くから、貴重で閲覧が難しい本物の代用品や、絵画の学習における一手段などの役割を担ってきました。しかし、文化財の概念や科学技術が普及した近代以降において、その役割は大きく変化しつつあります。変わらないものの代表のように見える古画の模写ですが、実は様々な目的や制作方法をもつ豊かな「うつし」なのです。本研究では、「人の手で写すこと」に関する資料や技術を保存し、本学の「うつし」の記憶として継承していくことを目的とします。また、より広い視点から「うつし」の文化的な奥行きについての考察を深めることを目指します。

本年度は、プロジェクト・リーダーの彬子女王殿下による特別授業「日本文化を考える～明治の選択～」が行われました。明治時代は、新たにもたらされる様々な文物を受け入れると同時に、失われゆくものを保護するという取捨選択を迫られた時代でもありました。本年は明治から150年を迎えた年であり、奇しくも平成最後の年でもあります。彬子女王殿下による皇室における明治維新をテーマとした基調講義をふまえ、国際化が進む現代において、うつし伝えていきたい文化・芸術についてのディスカッションが行われました。

また、これまで本研究では、入江波光とその門下生などによる法隆寺金堂壁画模写事業の記憶、そして金堂壁画の模写に使用されたコロタイプ印刷などの複写技術や、本学芸術資料館の模本資料などを対象にアーカイブを行ってきました。本年度は特に京都御所小御所の襖絵と、菊池契月一門によって描かれた模写を研究の対象に取り上げました。現在の小御所の襖絵は、安政度造営時の襖絵を原本として、昭和33年に模写されたものです。菊池契月は典雅な歴史人物画を得意とした画家であり、本学で日本画の指導にあたった人物でもあります。そのため、小御所の模写は本学にとって所縁の深い「うつし」の記憶といえるでしょう。小御所の原本と菊池契月一門の模写から、京都の画家達が何を写そうとしたのかを読み解きます。

来年度は、本学芸術資料館と合同で、これまでの研究の成果として、本学の「うつし」の記憶である模写を中心とした展覧会を行うことを計画しています。本学には、江戸時代から平成まで、数多くの模写が収蔵されています。これらを時代や目的に沿って紹介することで、人の手でうつし伝えられてゆくものの可視化を試みます。

小林 玉雨（美術学部非常勤講師）